

令和7年度 事業計画の実施状況

校訓

至誠・創造

教育目標

建学の精神「礼節を尊び、地域に貢献できる有為な人材の育成」に基づき、校訓「至誠・創造」の趣旨を体して、心身ともに健全で心豊かな人間を育成するとともに、使命感と正しい判断力を持つ意欲旺盛な人間の育成に努める。

(1) 教育面

1. 総括

令和7年度は、本校の教育活動において一定の成果が可視化された一方で、生徒募集の急激な悪化により、学校経営上の重大な課題が顕在化した年度であった。

学校評価アンケートにおいては、教育内容に対する生徒の肯定評価（「そう思う」）が22.7%から35.1%へ12.4ポイント上昇し、コース別活動も28.7%から40.4%へ11.7ポイント上昇するなど、教育の質的改善に対する評価は大きく向上した。

また、保護者満足度は「どちらかと言えば」を含め86.9%に達し、過去最高水準となった。

一方で、生徒募集は以下の通り急激に悪化している。

R4【特進】	88名(120)	【総合】	240名(280)	計	328名(400)	充足率	82.0%
R5【特進】	98名(120)	【総合】	335名(280)	計	433名(400)	充足率	108.3%
R6【特進】	80名(120)	【総合】	287名(280)	計	367名(400)	充足率	91.8%
R7【特進】	77名(120)	【総合】	241名(280)	計	318名(400)	充足率	79.5%
R8【特進】	74名(120)	【総合】	207名(280)	計	281名(400)	充足率	70.3%

わずか3年間で152名減（約35%減）という著しい減少であり、特に総合コースは335名から207名へと128名減少している。これは単なる広報上の課題ではなく、学校の魅力と外部ニーズとの乖離による構造的問題であり、本校の存立に関わる危機的状況と認識する必要がある。

2. 重点目標に対する成果と課題

(1) 学力向上

家庭学習の定着を中心に取組んだ結果、特進コースでは「生活の記録」の活用により平均30分以上の家庭学習時間を確保し、一定の成果が見られた。

一方、総合コースでは学習習慣の定着が進まず評価はCにとどまり、スタディサプリ等の活用も一部生徒に限定されるなど、学習の二極化が課題となっている。

また、学習指導に対する生徒の高評価は 24.5%にとどまり、「学力が伸びる実感」の醸成が今後の重要課題である。

(2) 進路実現

進路指導は個別指導の充実により概ね成果を上げ、特進・総合ともに評価 B となった。

進路実績としては、国公立大学約 40 名（静岡県立大学 14 名、静岡大学 8 名等）、私立大学では常葉大学 130 名、日本大学 13 名など、多様な進路実現を達成した。

一方で、進路希望の多様化により指導の難易度は増しており、よりきめ細かな対応が求められる。

(3) 生徒指導・生活状況

生徒の生活状況については、数値面で明確な悪化傾向が見られる。

【欠席】 7138 (R5)→6922 (R6) →7433 (R7) コロナ禍以前は 3000～4000 で推移

【遅刻】 5047 (R5)→5473 (R6) →5610 (R7) 2000～3000

いずれもコロナ前の約 1.5～2 倍の水準で推移しており、生活習慣や登校意欲の低下が顕著である。

また、生徒指導に関する教職員評価は肯定 33.0%、否定 58.0%と厳しい状況であり、「朗らか・爽やか・整える」の浸透も十分とは言えない。

(4) 教育相談

スクールカウンセラーへの相談件数は以下の通りである。

・生徒：61件 (R6) → 62件 (R7)

・保護者：13件 (R6) → 7件 (R7)

生徒の相談ニーズは高止まりしている一方で、保護者相談の減少については、相談機会の減少や潜在的課題の未顕在化の可能性もあり、注視が必要である。

(5) 部活動・地域連携

部活動加入率は向上している。

【部活動加入率】 70.6% (R5)→74.3% (R6)→75.9% (R7)

また、以下の部活動が全国大会へ出場し、本校の大きな強みとなっている。

バレーボール部、陸上競技部、ソフトテニス部、カルタ部、コミュニティ研究会（新聞班）、バトントワリング部、将棋部

地域連携においても、エキキタテラスへの参画、軽トラ市への参加など、地域との関係構築が進展している。

しかし、これらの成果が生徒募集に十分結びついていない点が課題である。

(6) 学校運営

学校運営は評価 D となり、月曜 7 限の活用不足、教職員の主体性の欠如、組織的連携の弱さなどが課題として顕在化した。

また、教職員の肯定評価が 3.7%にとどまるなど、組織としての疲弊や一体感の欠如が深刻である。

(7) 生徒募集（最重要課題）

募集状況は急激な悪化を示している。

特に令和8年度は、定員400名に対し入学者281名（充足率70.3%）にとどまり、約120名の未充足となった。

これは学校の魅力不足というよりも、

- ・教育内容の訴求不足
- ・コースの魅力の不明確さ
- ・ブランド力の低下

といった構造的課題によるものである。

3. 総合評価

令和7年度は、

【成 果】	【課 題】
<ul style="list-style-type: none">・満足度の大幅向上・部活動加入率75.9%・全国大会出場（7分野）・国公立大学約40名の進路実績	<ul style="list-style-type: none">・募集充足率70.0%・欠席7,433、遅刻5,610・教職員肯定評価3.7%・学校運営D評価

以上より「教育成果は存在するが、生活指導と組織運営の弱体化により募集力が著しく低下している状態」と総括される。

4. 今後の方向性

1. 募集再建（最優先）

部活動・進路実績を軸としたブランド再構築

2. 生活指導の立て直し

授業規律の確立と基本的な生活習慣の育成（欠席・遅刻の大幅削減）

3. 学力保証への転換

満足度から成果重視へ

4. 組織改革

教職員の危機意識と実行力の向上

5. 終わりに

本校は現在、「魅力はあるが選ばれない学校」という状況にある。特に、募集数の急減（3年間で約35%減）は、早急な改革を要する重大な警鐘である。創立100周年を見据え、教育成果を確実に入学者増へ結びつける構造改革を断行することが不可欠である。

(2) 財 務 面

「健全財政の堅持」の実現に努めたが、令和7年度から学校法人会計の改正により当年度分の賞与引当金（48,246千円）及び前年度分を賞与引当金（52,021千円）として特別支出に計上したことにより、令和7年度決算では基本金組入前収支差額は45,553千円の赤字となった。更に基本金を組入れ、前年度繰越収支差額 2,160,019千円に当年度収支差額を加えた結果、翌年度繰越収支差額は 2,084,951千円となり、経常収入（1,088,268千円）に対し1.91倍（昨年1.95倍）となった。

- 令和7年度当初の学園規模は下表のとおりです。（令和7年4月1日現在）

	富士見中学校	富士見高等学校	合 計
生 徒 数	16名	1,057名	1,073名
専 任 教 員 数	2名	49名	51名
特 命 講 師 数	0名	9名	9名
常 勤 講 師 数	2名	18名	20名
非 常 勤 講 師 数	3名	10名	13名
英 語 指 導 講 師 数	0名	2名	2名
スクールカウンセラー	—	1名	1名
専任事務職員数	1名	6名	7名
事務嘱託員数	—	4名	4名

- 人件費比率は、県及び全国平均並みであった。人件費依存率については学則定員充足率が81.3%（高校：定員1,200名に対し1,057名 88.1%、中学：定員120名に対し16名13.3%）と低い数値であるため全国平均をかなり上回っている比率になったと考えられる。（下表の3項目については低い値がよい。）

	令和7年度 富 士 学 園	令和6年度 全国高校法人平均
人 件 費 比 率 (対経常収入)	62.8%	62.9%
人 件 費 依 存 率 (対生徒納付金)	156.2%	125.0%
補正人件費依存率 (対生徒納付金+経常費補助金)	69.5%	71.4%

- 第1号基本金の組み入れ額について

第1号基本金建物の除却として第2棟東棟他の解体に伴い、233,365千円を取崩額として計上した。（内訳：設計監理費3,000千円、工事費203,365千円）

令和7年度 監理業務費8,250千円、工事費（中間払）293,000千円 計301,250千円

令和8年度は完成後（12月完成予定）、「建設仮勘定」から「建物」への振り替えを行います。